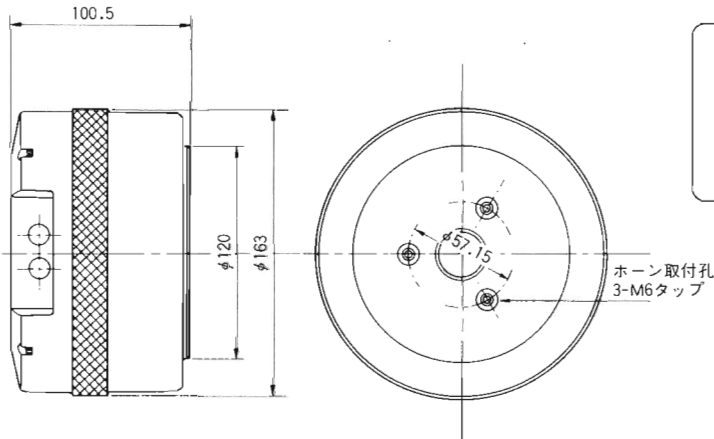




このたびはテクニクススピーカをお求めいただきましてまことにありがとうございます。

ご使用前にこの説明書をよくお読みのうえ、正しくお使いください。



## 付属品

六角ホルト……3コ  
ワッシャ……3コ  
スプリング……3コ  
ワッシャ

単位:mm

$\phi$  :直径を示す

## 定 格

インピーダンス	8 $\Omega$	磁束密度	18,800 Gauss
再生周波数帯域	*500~20,000 Hz	総磁束	164,000 Maxwell
推奨クロスオーバー周波数	700 Hz以上	ボイスコイル径	$\phi 45$ mm
出力音圧レベル	*106 dB/w·m	スロート径	$\phi 25.4$ mm
入 力	定格 30 W (RMS)	取付ピッチ	$\phi 57.15$ mm
	150 W (Max.)	総重量	3.7 kg

\*Technics EAS-75H100使用時

## 使用上のご注意

## 1. 過大入力を加えないでください。

ネットワークを通さずに入力を加えることは避けてください。また、アンプが発振していたり、出力が非常に歪んでいる場合には高音域成分が増加し、振動系を破壊することがありますから、そのようなアンプでは駆動しないようにご注意ください。なお、ネットワークを通していても30W以上の連続正弦波や矩形波は絶対に加えないでください。

## 2. 絶対に分解しないでください。

このスピーカは周波数特性直視装置によって特性を測定しながら組み立てています。性能が著しく悪化しますので、絶対に分解しないでください。

## 3. 落下などの大きな衝撃を加えないでください。

# ご使用方法

## 1. クロスオーバー周波数の決定

このスピーカの最大入力ネットワークのクロスオーバー周波数及び減衰度によって変化します。クロスオーバー周波数を高く選ぶほど最大入力が大きくなります。この関係は第1図に示してあります。

クロスオーバー周波数は最大入力との関係、また組み合わせるウーハの周波数特性および指向特性によって決定してください。本機の場合、クロスオーバー周波数は700Hz以上にするをおすすめします。

## 2. ネットワークについて

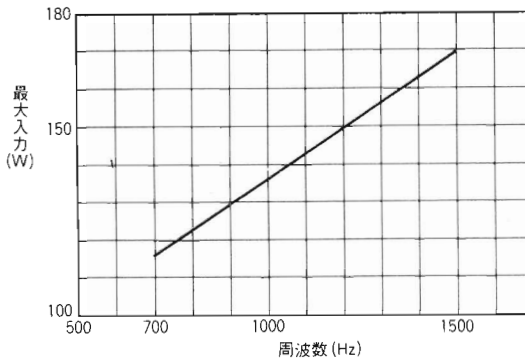
クロスオーバー周波数が決まりましたら第1表よりネットワーク定数を求めて第2図のように結線してください。

フィルターの減衰度は一般に6dB/oct.形と12dB/oct.形がありますので、ご使用のユニットに合わせた減衰度をお選びください。またコンデンサは十分な耐電圧を有するtan $\delta$ の小さいMPコンデンサや無極性電解コンデンサ等の良質のものをご使用ください。

## 3. 減衰器(アッテネータ)について

マルチウエイスピーカシステムでは、クロスオーバー周波数だけでなく、各スピーカのレベルを合わせることが大切です。アッテネータは可変式のレベルコントローラや簡単にお使いいただける抵抗式をおすすめします。抵抗式アッテネータは45D100とご使用になるウーハとのレベル差を周波数特性より求め、その減衰量のアッテネータ定数を第2表より求め、本機に第3図のように結線してください。

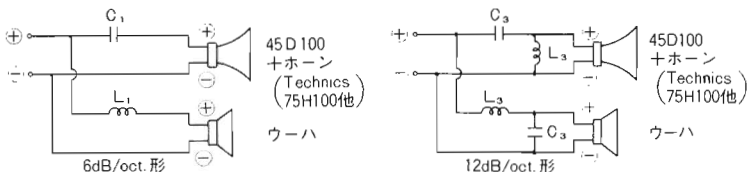
第1図 クロスオーバー周波数と最大入力の関係(12dB/oct.の場合)



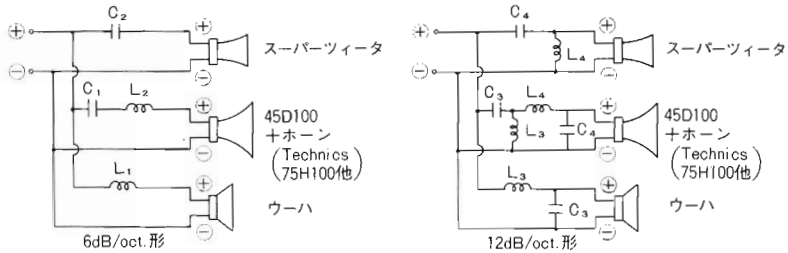
6278000  
(278000)

第2図 ネットワーク回路

### 1) 2WAYの場合



2) 3WAYの場合



6dB/oct.の場合の計算式

$$\begin{cases} C = \frac{1}{2\pi f R} & \text{[F]} \\ L = \frac{R}{2\pi f} & \text{[H]} \end{cases}$$

12dB/oct.の場合の計算式

$$\begin{cases} C = \frac{1}{2\sqrt{2}\pi f R} & \text{[F]} \\ L = \frac{\sqrt{2}R}{2\pi f} & \text{[H]} \end{cases}$$

f : クロスオーバー  
周波数

R : スピーカの  
インピーダンス

第1表 ネットワーク定数表

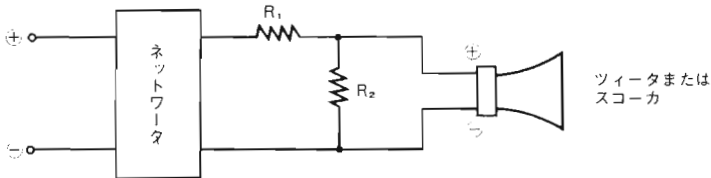
fc		700Hz	1kHz	1.2kHz	1.5kHz	3kHz	4kHz	5kHz
6dB/oct.	L <sub>1</sub>	1.8	1.3	1.1	0.85	—	—	—
	C <sub>1</sub>	28	20	17	13	—	—	—
	L <sub>2</sub>	—	—	—	—	0.42	0.32	0.24
	C <sub>2</sub>	—	—	—	—	6.6	5.0	4.4
12dB/oct.	L <sub>3</sub>	2.6	1.8	1.5	1.2	—	—	—
	C <sub>3</sub>	20	14	12	9.4	—	—	—
	L <sub>4</sub>	—	—	—	—	0.60	0.45	0.36
	C <sub>4</sub>	—	—	—	—	4.7	3.5	3.0

CやLの値がない場合は、2つ以上組み合わせてください。

単位 L : mH

C : μF

第3図 定インピーダンスL型アッテネータ

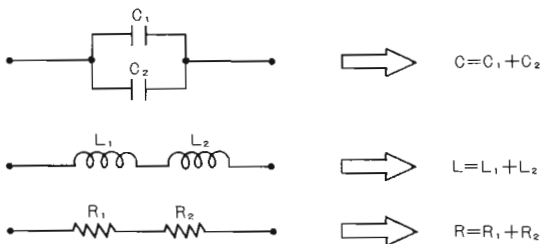


第2表 アッテネータ定数表

減衰量 (dB)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
R <sub>1</sub> (Ω)	0.9	1.8	2.2	2.7	3.3	3.9	4.4	4.7	5.2	5.6
R <sub>2</sub> (Ω)	78	33	18	15	10	8.2	6.5	5.6	4.4	3.9

Rの値がない場合には、2つ以上組み合わせてください。

第4図 2つ以上の組み合わせ例



# 特 長

## 1. 高耐入力

ボイスコイル線材は、銅被膜のアルミ線を採用しました。表面処理にはポリエステル絶縁層とポリアミド系接着層を有し、200℃の温度上昇にも耐える高耐熱処理を施し、また高耐熱ボイスコイルボビンを採用することにより、150W Max. の高耐入力化を計っています。

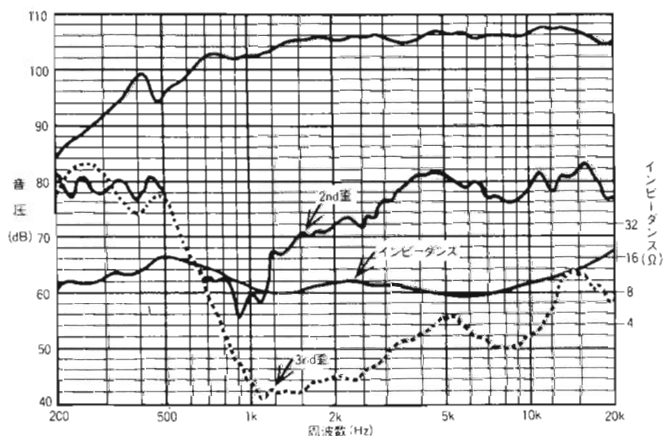
## 2. 広帯域

5重スリット構造を持つリニアフェイズイコライザの採用により、ホーンユニットからスロート部及びイコライザスリット部のダイヤフラム位置まで、その断面積変化に不連続点をなくし、正確な音響負荷をかけることができ、さらに5重の各スリットの音路長を均一化することにより、スロート部における位相分布を平面波に近づけることができ、ワイドレンジな特性を実現しています。

## 3. 高能率

高性能磁気回路を形成するため、エネルギー積の高いストロンチウムフェライトマグネットを採用し、精密切削加工された高能率磁気回路により18,800ガウスの高磁束密度を得ており、さらに20ミクロンのチタンダイヤフラムを採用し、振動系の軽量化を計ることにより、106dB/w.mの高能率です。

## 周波数特性



測定条件  
マイクロホン: B & K 4133  
入 力: 1W  
マイク～スピーカ間距離: 1m  
0 dB = 0.0002 μ bar

!Technics EAS-75H100使用時



松下電器産業株式会社 ステレオ事業部

所在地 〒570 大阪府守口市松下町 2

TEL 大阪 (06) 992-1551

本 社 〒571 大阪府門真市大字門真1006